



最近何かと女子高生の話が取り上げられていて、「ああ、私が高校生だった時代とは、もう全然違うのね」と愕然としてしまう。彼女たちの会話には、やたら「お金」という単語が登場する。「だって、お金が欲しいんだもの」「洋服やブランドのバッグを買いたいもの」などなど。

彼女たちの気持ちは理解できる。私だって、高校生の時は、たくさん洋服も欲しかったし、女子大生になってからはブランドのバッグが欲しいと思っただけでもあったから。けれども、私は学生時代、普通のアルバイトしかしなかったし、パンツを売ったりもしなかった。好きになるのは貧乏な男のコばかりだったし、お金持ちのおじ様なんて興味もなかった。という訳で、年相応の価格の洋服（かなり奇抜なファッションではあったけど）とアクセサリーがクローゼットをうめることになったのだ。

もちろん、デートなんて言っても、映画を見るときか、哲学の道を散歩するときか、ディスコに踊りに行くとかで、それも（クドイようだけど）恋人はいつも貧乏な大学生だったから、自転車に二人乗りして行動するという、現在の「ゴージャス」を売り込んでいる私（笑ってください、こ

れはいつも私が自分をおもしろがって表現するネタです）からは想像もつかないことをやってのけたのだ。

けれども私は、そういう青春時代を送って良かったと、心から思っている。なぜなら、彼と自転車に二人乗りして行動したこと、クリスマスだというのに、お金がなくて彼とラーメン屋さんでチャーシュー麺を食べたこと、クーラーのない彼の宿で、小さな扇風機を取り合っていてじやれ合ったことなどが、今、心の中でとても素敵な宝物になって、さらさらと輝いているのだから。もうそんなことができなくなってしまう今、それらの思い出は、私の胸を締めつけ、とてもせつなくて優しい気持ちにしてくれるのだから。

お金で買えるものなんて、30歳になった時に、手に入れたらいいのだ。40歳だってかまわない。けれども、私が青春時代にやったようなことは、若いうちだからこそ、惨めにならずに楽しめるのだ。そして、青春時代というのは、そういうことをたくさん経験する時期なのだ、と私は思っている。さらに、そういう青春時代を送った人こそ、素敵な、物事の解かる大人になれるのだ、と。若い時から賢沢三昧している人が、大人になって、社会的にも成功し、周囲の人たちからも人望が厚いなんて話、聞いたことないもの。

女子高生がインタビュに答えて言っていた。「若いうちに、せいぜい自分を高く売っておくのと。若いうちにしかできないことは、若さを売ることではなく、若さを楽しむことなのに。無鉄砲に行動し、仲間と馬鹿騒ぎをし、夢を描き、自分を嫌い

プロフィール 1965年生まれ。同志社女子大学卒、(株)電通プロダクション勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスマで、待てない」(大和書房)など。

MARUOKA IZUHO

になったり好きになったり、もがいて考えることで、生命を燃焼させることなのだ。

大学の最初の2年間、私は東京の大学生と遠距離恋愛をしていた。彼に会う交通費を作るために、私は試用の化粧品と髪の毛の毛がバシバシになるようなシャンプーが使えなかった。そして彼の方は、食費を削り、インスタントラーメンばかり食べていたために、やがて肝炎になって入院してしまっただ。

パンツを売り、お金目当てに好きでもないおじ様とデートをする女のこにとつては、「ばっかじゃないの?」と言いたくなるようなエピソードかもしれない。でも、そういう女のこたちに聞きたい。あなたには、10年後に何が残っているの?若さを失い、ブランドの洋服も古くなってしまった時、あなたには何が残っているの?

私には、何物にも変えがたい思い

出があるし、彼とは今も大親友として交際を続けている。(それほど夢中になって恋をした二人なら、やがて年月を経て、素敵な友達の間係をつくることのできるものなのだ)

お金はたしかに便利だと思う。賢沢は気持ちがいいし、私だって29歳の今の金遣いの荒さときたら、自己嫌悪に陥るほどだ。けれども、本当に大切なものは、絶対にお金では買えないし、若いうちなら尚更だ。

若さを失いつつある今、私は実感している。あの頃、恋に、馬鹿騒ぎに、夢を描くことに、もがくことに、あんなに夢中になれて良かった、と。今の私が充実した毎日を送ることができるのは、あの青春があったから。お金はない、けれども情熱がある。そういう青春時代を過ごして下さいます。いつかそのことを、良かったと思う日が必ずくるはずだから。

